

# ぼむ・ぼむ通信

No. **37**

## ●2007年ユニセフリーダー研修・交流会が開催されました

9月3日から7日にかけて東西2会場に分かれて開催されました。全国から26生協・3県支部合計83人の組合員・役職員が参加しました。ユニセフ現地報告（スワジランド）・生協からの活動報告・グループに分かれての交流会などのプログラム。各地の生協の活動事例を聞き、交流を深める場となりました。新しくユニセフに取り組み始めた生協の今後が楽しみです。



### リーダー研修・交流会 東日本会場 の報告

4班に分かれての交流・討議のなかで、さまざまな声が、提案がありました。

#### 仲間を増やすための提案

- ・ イベントを組織的にするだけでなく、隣の人、家族など身近な人たちに声をかけよう
- ・ 古切手収集作業を人が集まる公共施設のロビーですること、そこに来た人達に関心をもってもらう
- ・ 参加する機会を多くし、入り口を増やす。参加しやすいような型（体験型など）参加しやすい時期の検討
- ・ 若い人達への働きかけ—大学生協では「水を飲むならボルビック」（ボルビックの購入を通じてユニセフを支援できる）と学生達にアピールしたり、募金はなんとなくカッコイイ外国コインで募ってみたりとさすが！
- ・ 何かやるときは募集をかけてはどうか。何かしたいと思っている人は一人でも参加してくるし、持続性あるのでは

#### ユニセフをわかりやすく伝える工夫

- ・ 人身売買という難しいテーマをきれいな絵と効果音で紹介された紙芝居。引き込まれて見入ってしまいました。
- ・ スケッチブックを利用して、ユニセフ手帳に書かれている事柄を大きく絵と字で再現。1枚1枚めくりながら、説明していくのは とてもわかり易い。
- ・ 大きな布に世界地図を描き 指人形がそれぞれの国を旅行する形で、世界の食糧事情を説明しています。とのお話。残念ながら実物は見ることはできませんでしたが。
- ・ 昨年完成したユニセフすごろく（ぼむぼむ3号で紹介）その時、対象の人にあわせて、説明なども工夫する。貸し出しには数に限りがあるので、それでは・・・と自分たちで作成中。手芸の得意な組合員さんがサイコロも手作りしているそうです。



#### 《参加した通信委員の感想》

今活動している自分たち仲間だけでなく、会員の人達一人一人が自発的に取り組んでいってもらえるようになるのが大切！その思いの強さ、失敗を恐れずに！という参加者の方の言葉には前向きで頼もしさを覚えました。（松本）

いろいろなツールを考えること、制作することアイデアを出し合うこと、そのことが楽しい活動になっている様子が伺えました。（山本）



## ＜神奈川県支部の谷杉さん＞

ラオスの指定募金を2006年度から取り組む中で子ども達が入りやすい媒体として紙芝居を作りたいと考えた。ただし、紙芝居だけを見せるのではなくその前後にはユニセフの活動やラオスの現状を伝え、その手助けの一つとして紙芝居を使うことを考えている。読み手のボランティアの方の協力もあり、8月25日のサマースクールでデビュー。今後要望があれば貸し出しも考えている。



## ＜絵はもちろんストーリーも手がけてくれた蛭沢さん＞

まずラオスのことを知ろうと図書館通い。旅行会社のパンフレットももらい、地理、歴史、文化等々調べて、行ったことがある人みたいにラオス通に（笑）。人身売買という思いテーマですが主人公の少女は死なせたくなかったの、少女の姉には残念ながら亡くなってもらうことに。ドラマティックにするために、ラオス語で天国という意味をもつサワナケートという町を少女の故郷にし、少女を助ける方法にラオスでもよく知られている魂と魂を結ぶ木綿の白い糸、パーシーを登場させることにした。



## ワークショップ「支援のあり方を考える」

タイ農村部の学校を支援している日本人「あい子」さんの事例を題材に、支援のあり方について話し合いました。「寄付の使い道を明確にすべき」「村の人が何を必要としているかを調査すべき」「金銭をあげることは自立にはつながらない」などの意見が出されました。

## 生協からの活動報告

## ■京都生協■

毎年ブロック持ち回りで3月に開催しているお年玉募金贈呈式の実行委員会を対象に、8月にユニセフサポーターさんが学習会を行いました。内容は、①世界の食料事情を知るための食料分配ゲーム→自分たちが食べているものはどこの国から輸入されているかを知り、地図で記入する→食料自給率について調べる（食から世界を考える）②ラオス語で水をあてるゲーム（識字から世界を考える）③ユニセフを知る〇×ゲーム④石油からできているものは？（身の回りのものと世界のつながりを知る）という4部構成。小さい子どもにもわかりやすく好評でした。

## ■ならコープ■

組合員のボランティアグループが中心となって企画した「ユニセフまつり2006」では、ラオスの視察報告やゲーム、ラオスのくらし紹介を行いました。「まつり」という親しみやすい名前と理事からの呼びかけ、エリア会議での紹介などこまめな広報のおかげで、子どもも含めた65人が参加してくださったそうです。

## ■富山県生協■

組合員さんによる手作り紙芝居が紹介されました。各ブロックのイベントにあわせて紙芝居の上演などユニセフの学習を組みこんでもらっているそうです。



## ■コープえひめ■

イベントでのスーパーボールくじ募金、サンキューカードセット、卓上すごろく、スケッチブックを使った簡易紙芝居など、サポーターの方々の様々なアイデアが披露されました。ボーイスカウトや大学、商店街など地元の様々な団体とのネットワーク作りに参加者の皆さんも感心されていました。



サハラ以南のアフリカは HIV/AIDS の深刻な影響を受けており、子どもたちはその被害の最前線にいます。スワジランド王国でも、多くの子どもたちが、エイズによって保護者を失い、命を失っています。2002 年から 2004 年まで、ユニセフ・スワジランド事務所のアシスタント・プログラム・オフィサーとして活躍なさっていた大井佳子さんに、現地の状況とユニセフの活動についてお伺いしました。



### 3 人に 1 人は HIV の被害者

#### 10 人に 1 人は孤児

スワジランドの HIV 感染率は、2006 年、度妊婦を対象に検査を行った結果、39.2%でした。つまり 3 人に 1 人は HIV に感染しているという状況です。5 歳未満児死亡率も高く、その原因の 47% はエイズです。

HIV/エイズで亡くなるのは、働く人口の人が多いため、お年寄りとも子どもが残され、過酷な状況です。特に悲惨な場合には、子どもたちだけ残されてしまうこともあります。孤児の数 (0 から 17 歳) は、2003 年時点で 102,319 人。人口が 100 万人強のスワジランドでは、人口の約 10 分の 1 が孤児という状況です。

孤児になると、日常生活のお世話をしてくれる大人がいなくなるため、衣食住の質が落ち栄養不足などになります。それにより病気になりやすくなり、HIV に感染していることの多い孤児たちは、早くエイズを発症して亡くなってしまう可能性も高くなります。病気になってもクリニックに連れて行ったりしてもらえないので、適切な処置も受けられません。孤児に対する性的虐待も深刻な問題になっています。レイプをされ、性器に傷がつき、HIV に感染する子どもも多いです。学費が払えなくて学校に行けないという問題もあります。

### HIV/エイズの脅威から子どもを守る

このような状況を受けてユニセフのスワジランド事務所では、HIV/エイズの影響を受けている子どもを守るために様々な活動を行っています。プログラムは 4 つに分かれていて、1 つ目は子どもの健康と発達プログラムです。HIV の母子感染の予防、予防接種、子どもの HIV 治療がこれにあたります。2 つ目は教育とライフスキルプログラムで、孤児の就学サポート、ライフスキル教育を行っています。3 つ目は、セーフティーネットと子どもの保護で、コミュニティ孤児ケアポイントのプロジェクトを行っています。最後は、子どもの権利と HIV エイズ、子どもへの虐待に関する意識改革の活動です。

### コミュニティとの協力

ユニセフは、まず、首長さんなどを通して村の住民集会などを呼びかける活動を行います。その中で地元の人に、タブーとされていた問題に向き合って、コミュニティとしてできることを話し合ってもらい、ユニセフはそれをもとに活動プランを立てています。コミュニティ孤児ケアポイントは、住民から推薦されたケア・ギバーと呼ばれるボランティアが、5 歳以下の孤児を集めて、食事、衛生ケア、カウンセリングなどを提供する場です。ユニセフはケア・ギバーに必要な研修・物資などを提供しています。孤児の就学サポートプロジェクトでは、コミュニティが特定した未就学や退学した孤児の就学のために、授業料・テキスト代・その他の必要経費をユニセフが小学校に贈与します。その代わりに小学校は、学校給食の実施、適正な資金管理、増えた児童への対応のための教員雇用などに責任を負っています。HIV/エイズへの意識改革プロジェクトでは、ラジオ番組や、ドラマフェスティバル、映画などを通して、楽しみながら、HIV/エイズに対する不必要な不安を取り除き、正しい理解を促しています。

### 希望を持って

妊婦の HIV 感染率が、2004 年の 42.6% から 2006 年、39.2% に下がりました。まだまだ道は長いですが、希望を持って地道にがんばっていききたいです。

(文：日本ユニセフ協会インターン 辻井萌子)



『子どもとエイズ』世界キャンペーンにご協力下さい  
郵便振替：00190-5-31000  
(通信欄に「子どもとエイズ」と明記して下さい)  
口座名義：財団法人日本ユニセフ協会

# 知りたい? 知っここ。ユニセフ ～難民編～

## Q 難民、避難民について 教えてください

### 難民とは・・・

戦争・地域紛争・自然災害等で自分たちの住む家なくなる。又は、そこに住めなくなり国境を越えて他国に庇護を求めた人々。難民条約では「人種、宗教、国籍、政治的意見やまたは特定の社会集団に属するなどの理由で、自国にいと迫害を受けるかあるいは迫害を受ける恐れがあるために他国に逃れた」人々と定義されている。現在はその定義を拡大し、戦争や内戦を理由に自国から逃れた人々も難民として見なされている。

<難民出身国 上位10カ国> 2005年1月1日現在 注(1)

アフガニスタン注(2)	2,084,900
スーダン	730,600
ブルンジ	485,800
コンゴ民主共和国	462,200
ソマリア	389,300
パレスチナ注(3)	350,600
ベトナム	349,800
リベリア	335,500
イラク	311,800
アゼルバイジャン	250,500

注(1) この表は、2003年に先進工業国に逃れた難民と庇護希望者の認定数に基づき UNHCR の推定した数値が含まれる。

注(2) UNHCR 推定数。イランの数値については、2004年に多数が帰還を果たしているものの、包括的難民登録を実施したことから、数値は上方修正されている。パキスタンの数値については、難民キャンプに居るアフガン人のみが含まれており、同国内のキャンプ以外の場所に住むアフガン人で、2005年初めに人口統計で含まれた難民である可能性のある190万人は含まれていない。

注(3) 国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)が担当するパレスチナ難民(推定400万人以上)は UNHCR の援助対象者として含まれない。ただし、イラクやリビアなど UNRWA の任務地域外に住むパレスチナ難民は UNHCR の援助対象者となる。(UNHCR HP より)

### 避難民とは・・・

戦争・地域紛争・自然災害等で家をおわれたが、国内にとどまり、国境を越えず避難生活を送っている人々。近年増加している。難民と同様に外部からの援助なしには生活できない。

<50万以上の国内避難民がいると推定されている国々> 2004年度

スーダン	4,000,000
コンゴ民主共和国	3,400,000
コロンビア	3,100,000
ウガンダ	1,600,000
トルコ	1,000,000
アルジェリア	1,000,000
ミャンマー	600,000～1,000,000
イラク	900,000
コートジボワール	500,000～800,000
インド	650,000
アゼルバイジャン	570,000
インドネシア	530,000
バングラデシュ	150,000～520,000
リベリア	500,000
スリランカ	430,000～500,000
シリア	200,000～500,000

(世界子供白書 2005 より)

## Q 難民・避難民の子どもたちはどんな状況ですか

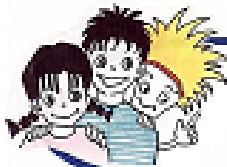
2004年末現在、世界中の全難民のおよそ48%が子どもであった。同じ年、紛争ないし人権侵害による国内避難民の総数はざっと2500万人にのぼった。住む家を失い、健康や教育を脅かす貧弱な条件で暮らさなくてはならない。

- ※ 避難生活の中では 出生登録や旅券の発行が困難になり身分証明の権利が侵害される  
教育や保健ケアといった基本的な社会サービスを受ける権利、働く権利があることが証明できなくなる
- ※ 家族が離れ離れになる場合がある。家族の保護を失うと  
虐待・性的暴力の対象となるおそれきわめて大きくなる
- ※ 避難が長期に及び 受け入れ先の地域と異なる民族的・言語背景があると  
差別の対象となり、その結果学校に通いにくくなる場合がある。
- ※ 避難先で過ごす期間が数年、数十年におよぶことがあまりにも多い  
子ども時代全体を難民キャンプで過ごすこともある。(スーダン南部などでは、一度も故郷の家に住むことなく終わっている)

難民支援活動を行っている主な国際機関は

国際難民高等弁務官事務所(UNHCR) 国連パレスチナ難民救済事業機関(UNRWA)  
国連世界食料計画(WFP) 国連人道問題調整事務所(OCHA) 国際移住機関(IOM) 赤十字国際委員会(ICRC)

家を離れ避難を余儀なくされた人々は世界で4000万人。そのうち国境を越えた難民は3分の1。残り3分の2が国内避難民だが国内であるがゆえ「干渉」とみなされ、国際法上の保護を享受できる難民と異なり、支援することがはるかにむずかしい。

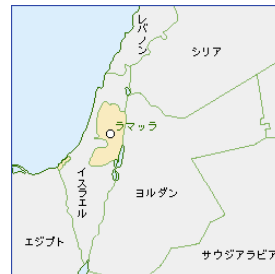


# 世界の 子ども達は今

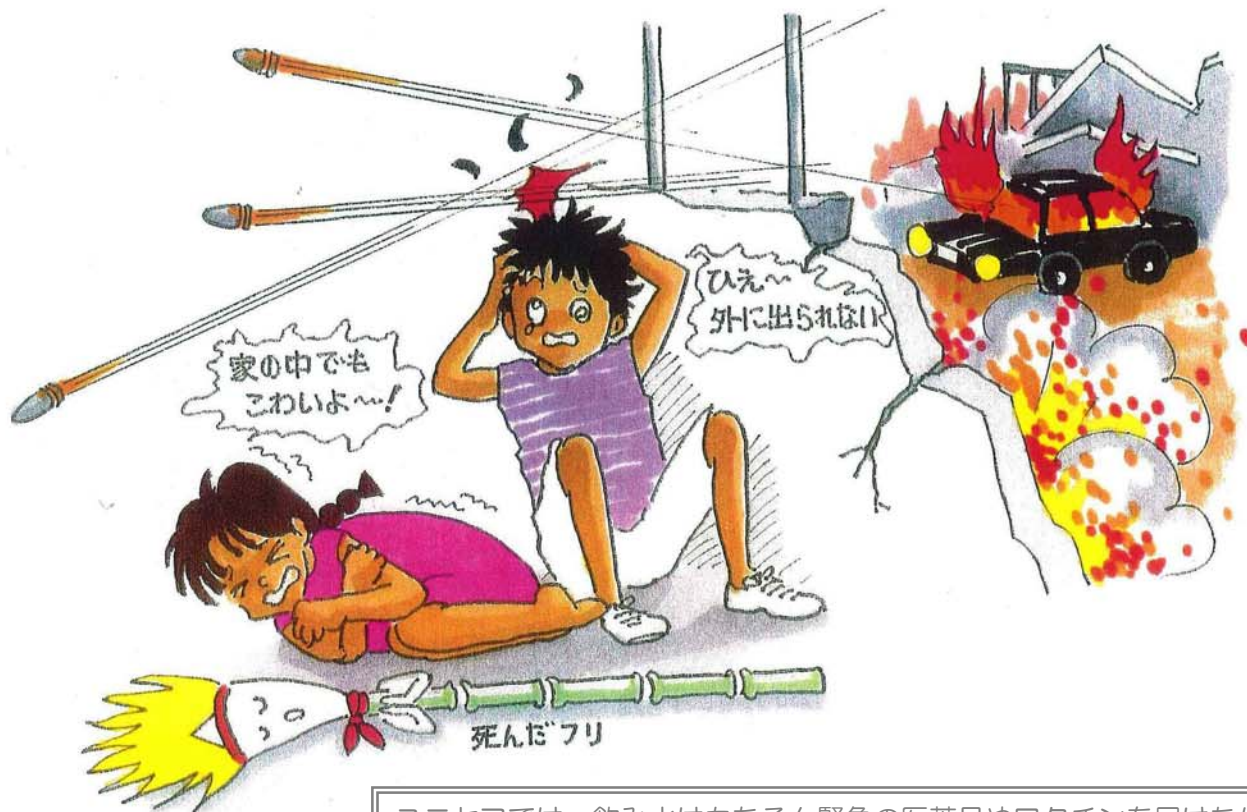
<パレスチナ>

(文) 松本真弓

(絵) 蛭沢素子



1948年イスラエルが建国されたことによって、それまで住んでいた土地を追われ難民となった人々やその子孫。長期にわたる難民生活に加え、2007年6月には、パレスチナ内部の武力衝突で多くの人々が電気・水道も使えない状況に陥り、病院や学校も大きな被害を受けています。



ユニセフでは、飲み水はもちろん緊急の医薬品やワクチンを届けたり、水と衛生システムを稼働させる為の燃料の供給もしています。また、ショックと極度のストレスを抱えた子ども達の治療や、青少年の為の学習センターや「安全に遊べる場所」を支援し子ども達をケアしています。



パレスチナ自治区全体では、10人に一人の子どもが発育阻害の状態であり、北部ガザ地区では子どもの30%が年齢相応の身長に達していないという状況になっています。



### ユニセフの取り組みを総代会会場でお知らせしました

2007年6月8日(金)第61回コープかながわ通常総代会(於 新横浜プリンスホテル)会場にて、ユニセフ募金の贈呈式、およびコープかながわが取り組んでいるユニセフ募金の紹介を行いました。



2006年度のユニセフ募金をコープかながわ小林理事長より(財)日本ユニセフ協会神奈川県支部長飯田様に贈呈。



コープかながわが重点的に呼びかけているラオス指定募金のコーナーでは、昨年スタディーツアーに参加した平手理事の写真や感想文など、現地の様子を伝える生の声をパネルにして展示。(当日は金銭管理の関係で募金箱は置けませんでした、多くの組合員さんが足を止めて見入っている姿がありました)

アグネスチャンさんからコープかながわにいただいたメッセージと、“国際交流グループいずみ”が横浜市泉公会堂で行ったアンデス音楽チャリティーコンサート(収益はラオス指定募金として30万円募金)の様子を紹介。また、神奈川県支部から地雷のレプリカをお借りし、展示しました。



## ユニセフ協会 宮城県支部で、外国コインの仕分け作業が行われました

「日本で両替することができずに眠っている外国コインを有効に利用することはできないだろうか」という声に応えて、「ユニセフ外国コイン募金」は 1992 年にスタートしました。

宮城県では横浜税関仙台空港税関支署のご協力により、1998 年 3 月に仙台空港国際線税関検査場に「ユニセフ外国コイン募金箱」を設置しました。国際線を降りた方が通るところにありますので、注意してみてください。日本ユニセフ協会（東京）では、民間企業 5 社の協力のもと、集まった外国の通貨を海外に輸送し、ユニセフの活動資金として世界の子どもたちのために役立てています。

宮城県支部では、毎年「夏休みユニセフ教室」として、外国コインを国別に仕分けする活動を行っています。今年で 10 回目になります。

7 月 24 日（火）に小学生の親子 2 組を含むボランティアの参加で、空港の募金箱からコインと紙幣を回収してきました。

仕分け活動は 8 月 18 日（土）、みやぎ生協文化会館ウィズにおいて、小学生・中学生・高校生・大学生、留学生、ユニセフボランティア等、総勢 40 人が参加して行われました。この活動は「外国のコインを仕分けする」ことが中心ですが、世界各国のコインに接することで、世界の見知らぬ国やその国で暮らす人々のことにも思いを馳せることができました。この日は中国・韓国・インドネシア・ルーマニアからの留学生（宮城教育大学、東北大学、宮城高専）にも参加していただき、そ



それぞれの国のことや日本で勉強しての感想、将来への夢や参加した子どもたちへのメッセージなどもいただきました。特にルーマニアの民族衣装の披露と「ルーマニア〇×クイズ」は、みんなが盛り上がりしました。

この日の集計・換算の結果は 418,037 円（去年は 316,834 円）でした。51 ヶ国の通貨があり、特にアメリカ・中国・韓国などが多かったです。

### 思い出の地の外国コインを世界の子どもたちのために。。

### ユニセフ外国コイン募金

机の中や財布の小銭にまざって忘れられている外国コインはありませんか。出張や旅行で海外に行ったときに使った外国通貨は、一部の国の貨幣を除いて日本では両替できないので、お土産や記念品にする方も多いみたいですね。日本ユニセフ協会では、そんな外国コインを世界の子どもたちのために役立てる「ユニセフ外国コイン募金」を実施しています。空港などで募金箱にいれる、郵送や宅配便で送るなどの協力方法があります。詳しくは下記サイトをご覧ください。

[http://www.unicef.or.jp/cooperate/coop\\_coin.html](http://www.unicef.or.jp/cooperate/coop_coin.html)



## TOPICS

### ペルー地震 活動報告



©UNICEF Peru

被災地へ支援物資が届く

2007 年 8 月 15 日にペルーを襲った大地震により、85,000 人以上が被災、500 人以上が亡くなりました。震源近くのピスコでは 85% 近くの家屋が倒壊しました。被災地に入ったユニセフペルー事務所の保健担当官マリオ・タベラ氏は「被害の一番大きな地域はもっとも貧しい地域。倒壊した家屋のほぼ 100% は泥れんがで造られている」と言います。

子どもたちを汚い水が原因の感染症から守るために、ユニセフは、地震発生直後、水の塩素消毒剤 9 万錠、蛇口とふた付の大型貯水容器 540 個、塩素計量器 300 個、浄水剤 2 万錠を届けました。さらに発生翌日までに、プラスチック製のスプーン 3,000 個、軽量ジャー(1 リットル)1,500 個、プラスチック製のコップ 3,000 個を届けた他、下痢による脱水症状を防ぐための経口補水塩 10 万袋を被災地に配布しました。

さらに、ユニセフは感染症の蔓延を防ぐため、安全な水を使用するためのチラシ 4,500 枚、結膜炎予防についてのチラシ 3,000 枚、皮膚病予防についてのチラシ 4,300 枚、適切な食事と衛生習慣の重要性を訴えるチラシ 4,100 枚、肺炎予防のためのチラシ 6,500 枚、急性下痢性疾患予防のためのチラシ 3,300 枚を配布しました。

避難民キャンプ内では、ユニセフから 20 張のテントが提供され、3 歳以下の子どものための包括的栄養プログラムが支援されています。ここでは乳幼児向けのプログラムやおもちゃも提供されています。又、地震では多くの学校も被害を受けました。ユニセフはパートナー団体と協力しながら、子どもたちが一刻も早く学業を再開できるよう、仮設校舎の設置や教材の提供などのバック・トゥ・スクール(学校に戻ろう)キャンペーンの準備をすすめています。



©UNICEF Peru

(全体レイアウト 尾澤結花)

## ぽむぽむ広場

☆ぽむぽむ通信の通算 37 号をお届けします。全国のユニセフ協力活動の交流誌としての役割はもちろん、世界の国々や子どもたちの様子も積極的に紹介していきます。また、各地の活動の参考になるような取り組みのご案内も行っています。

☆全国の活動事例や、ぽむぽむ通信の感想・ご意見をぜひお寄せください。

☆次号は、12 月 15 日発行です。お楽しみに！

ユニセフ\*コープネットワーク

ぽむ・ぽむ通信

No.37 2007 年 10 月 15 日発行

編集 グループ ぽむ・ぽむ

スタッフ・編集/尾澤・谷杉・浜崎・福本・藤森・  
松本・山本・林田・高井

イラスト/蛭沢

発行 日本生協連 組合員活動部

〒150-8913

東京都渋谷区渋谷 3-29-8 コーププラザ 11F

TEL03-5778-8124 FAX03-5778-8125

ホームページ <http://www.jccu.coop/>